

# 子どものケンカを「発達の視点」で捉える

滝 たき 充 みつる  
国立教育政策研究所総括研究官

「教育」とは何か。文字通り考えるなら、対象となる相手（たとえば、子ども）を、（たとえば、大人が）教え、育てる、ということである。では、この文脈で「育てる」とは、どういうことか。それは、「発達を支援する」こと、ときに褒め、ときに叱り、対象となる相手が発達するのを支える、ということである。この雑誌の読者のみなさんなら、こうした説明に概ね賛同してくれるに違いない。だが、賛同してくれた、あるいは特段の反対を表明しなかった読者といえども、この表現に込めた私の真意をどれだけ正しく理解できているのだろうか。

このような傲慢ともいえる書き出しで始めたのは、日本各地の教育関係者と接していると、子どもの育ちを支えるというより、むしろ妨害したり阻害したりしているとしか思えない教師や保護者に会おうことが少なくないからである。もちろん、妨害や阻害といっても、危害を加えたり、手抜きをしたりということではない。むしろ、その反対で、子どものために熱心に取り組んでいる、そんな教師や保護者の行為に潜む問題が気になるのである。

熱心な教師や保護者なわけだから、彼らが悪意をもって意識的に妨害・阻害しているというのではないことは、いうまでもない。むしろ、彼らの行為の多くは善意からなされており、営利が絡んでいる場合でさえ、よかれと信じて行っているものと思われる。だが、善意からとか無自覚にとかいったところで、結果的に子どもが発達する機会を奪っているのなら、同じことである。そうした問題を自省できないようなら、子どものケンカについての議論も噛み合うまい。そんなわけで、まずは「教育論」から始めることにしたのである（なお、本稿ではこの雑誌の読者に合わせ、教育の対象となる者を「子ども」、教育を施す者を「大人」「保護者」「教師」のように書き進めることを原則とする）。

## 「発達を支援する」とは

私は、「育てる」ことを「発達を支援する」こと、と書いた。このようにまわりくどい表現をするのはなぜなのか。多くの場合、とりわけ育てる対象が子どもの場合、彼らの内には「発達しよう」とする潜在的な力がある。それは、植物の種子が自らの内に発芽に必要な養分を備えていて、条件が整えば自ら発芽していくようなものである。だから、「育てる」ということは、何もない白紙の上に文字を書き込んでいくといったイメージの営みとは異なる。私の言う「育てる」、すなわち「発達を支援する」とは、まずは発芽の際に必要な適度な水分と温度を整えていくことにあたる。あくまでも「子どもが育つ」のを大人が支えるというイメージ、子どもを「主体」として捉えたうえで、大人はその補助者になるといえるものである。その意図を正しく伝えたいため、あえてまわりくどく「発達を支援する」と表現しているのである。



もちろん、発芽後は自身で根を張って水分や養分を獲得し、葉を広げて光合成を行い、放っておいても成長する植物の場合であっても、厳しい条件下で発芽した場合や天候不順等の場合には、別途、水分や養分を補ったり、害虫を除去したりする必要もでてくる。また、ときには伸びていく方向を誘導する等の必要も出てこよう。そうした「補給」「保護」「導き」の中には、「支える」という営みの延長線上にある単純なものから、「教える」ことに相当する複雑なものまでが、含まれてくる。とりわけ人間は「支援する」だけでは済まない生き物なので、「養育」とは区別して「教育」と呼ぶのであろう。

だが、「教育」の中には、働きかける側の意図や要求にのみ基づき、働きかけられる側の意欲等を無視して行われるものも少なくない。せっかく発芽した植物に、状態を確認しないまま過剰に水や肥料を与えたり、内在する力や伸びようとする方向を無視して、育てる者の好みや都合に無理に合わせようとしたりするような、そんな「教育」も存在する。このとき、下手をすると植物自体を枯らす結果に終わると同じで、相手の「吸収したい」という欲求や「発達しよう」とする潜在的な力とうまく合致させないと「教育」は成立しないし、それどころか害になることすらある。あくまでも子どもの内にある意欲や力を前提とし、それを十分に発揮させる、うまく発達させるという姿勢が、「教育」を成功させる鍵といえる。

ところが、英語の *develop* を自動詞としてではなく他動詞として用いたがるような人々、すなわち「*s*が発達する」よりも「*s*を開発する」という文脈で理解することの多い人々には、こうした指摘もまともには受けとめてもらえないのかもしれない。人間に都合のよいように自然を改良したい、開発したいと考えるのと同様、大人に都合のよいように子どもを変えたい、

子どもの力を開発したい、という発想に立てば、子どもは単なる目的語になる。そこでは、主語となるはずの子どもの意志や意欲は考慮されない。「子どもが育つ」のを支援するなど表現せず、もっと簡単に「子どもを育てる」といえばすむ。そのような教育観においては、子どもはもはや主体ではなく、操作される対象(客体)でしかない。たとえば、出発点は子どもを思う愛情や子どもの幸せを願う気持ちによるものであっても、である。

### 「子ども主体」と「大人主導」を分けるもの

もちろん、私が主張したいのは、「子ども主体」が絶対的に正しく「大人主導」は間違い、などといった短絡的なことではない。大人の目から見て子どもが明らかに好ましくない状態、たとえば法に反している等と判断するなら、子どもを矯正する、治療する、等のように、子どもの主体を二の次にして好ましい状態へと改善することは当然の行為である。私たちは、大人も含め、この社会の中で生きていくしかないわけで、そうした前提を脅かす欲求等を、そのまま放置したり受け入れたりするわけにはいかない。子どもを保護する、管理する、訓練する、等は、子どもが社会の一員として共生を図っていきけるよう育つために不可欠な行為である。しかし、だからといって、子どもには判断力がないかのように「大人主導」の発想だけで押し進めることを「教育」と考えてももたっては困る。主体となるにふさわしい判断力の獲得も含めて「発達」だからであり、そう育つように支援することが「教育」だからである。

子どもを主体として位置づけるのか客体として位置づけるのか、「子ども主体」にするのか「大人主導」にするのか、等の判断は、対象者の「(相対的な)発達の程度」に応じて異なっ

くる。そして、それを適切に考慮することが、「教育」を行う際には求められる。たとえば、高校生よりも小学生のほうが、同じ高校生でも簡単な事柄に取り組む場合よりもむずかしい事柄に取り組む場合のほうが、より専門的な「大人主導」の働きかけが必要になるし、その逆であれば、より多くを子どもに任せた「子ども主体」にできる。そして、最終的に任せきることができるよう「発達の程度」を勘案しながら支援していくことが「教育」なのである。

つまり、「教育」には、まるで正反対のように方向の異なった働きかけ方を、その時々の子どもの「発達の程度」に応じて使い分けていくことが求められる。しかも、厄介なのは、現時点の到達段階だけで「発達の程度」を判断したのでは不十分、という点である。外見上は同じようなレベルであっても、たとえば「発達途上にある子ども」と「発達しなかった大人」とでは扱いが異なる。すなわち、現時点では未熟な状態だが、機会を与えれば「発達の可能性」がある存在には、自力での発達を促すべく、あえて「子ども主体」で任せることも意味がある。一方、既に完成の域にあり、現時点での未熟さは「欠損・欠陥」と判断される存在に対しては、欠けた部分を「大人主導」で矯正したり補償したりするしかない。

### 「発達」を無視した議論や実践

ところが、近年、そうした「発達の程度」や「発達の可能性」といった「発達の視点」を欠いたまま、「教育」の議論を進める傾向が強くなっている。教育外の専門家に協力を求めることが増える中で、とりわけ子どもの場合には発達を考慮する必要があることに気づかず、大人相手の常識を子どもの世界にそのまま持ち込む例が増えたからであろう。発達途上の子どもが未熟であること、未完成であることは当然なのだが、大人相手の経験は豊富でも子ども相手の経験は乏しいカウンセラーが、大人の基準で子どもを「異常」と診断するようなことが、しばしば起きる。いわば、子どもを「小さな大人扱い」してしまうのである。

他方、子どもが未完成であることは理解できても、「発達の可能性」が念頭にない場合もある。つまり、発達しなかった大人や、発達上の課題を抱えている大人と同じであるかのように受け止め、いわば「病んだ大人扱い」してしまうのである。実体験不足等で育ってきた大人のために開発されたエクササイズやスキル訓練等の手法を学校教育に持ち込もうとする実践などは、その典型例といえる。そこには、少なくとも二つ、検証されるべき点がある。一つは、発達した大人には無害であっても発達途上の子どもにも同じく無害かどうかという「発達の程度」をふまえた検証である。もう一つは、可塑性の低い大人のために開発された疑似体験教材の安易な提供により、実体験の中で子ども自らが試行錯誤する機会を妨げないかという「発達の可能性」に関する検証、すなわち「大人主導」の訓練の導入により、「子ども主体」で実体験する時間（機会）が減ったり、マニュアルで考える癖をつけてしまったりする弊害はないかという検証である。

家庭においてもこのような問題は見られる。「自立させるため」と称してまだ幼い子どもを突き放してみたり、反対に「やさしさ」や「思いやり」という装いのものと、「してあげる」「守ってあげる」と称して子どもが自らの体験を通して学ぶはずの機会を奪ったり、という状況が増えている。「発達の程度」の判断を誤り、「発達の可能性」を無視した状況といえる。

## 子ども同士のケンカを「発達」の機会に

では、いわゆる「子どものケンカ」の場合、発達の機会を奪わないよう「発達の視点」を加味して考えると、どういった対処が考えられるのだろうか。いくつかの例を挙げてみたい。

## ①武器や禁止された手段を用いたケンカ

子どもをしていることが法に触れるような場合、そこにとどのような意義を見いだそうとも、大人は毅然として否定しなければならぬ。違法行為・触法行為を容認せず、明確な否定や禁止を伝えることによって、子どもの発達を促す必要がある。幼すぎて正しく理解する力がない場合であっても、大人の剣幕で事の重大性にだけは気づかせることができる。「発達の程度」や「発達の可能性」を問わず、「大人主導」の速やかな働きかけが求められる。

## ②幼い子どものおもちゃの取り合い

自らの欲求を満たすことが他者の権利や欲求と対立することを切実に学ぶ、おそらくは人生で最初の機会であろう。大人との関係では自分が譲ってもらおう立場、尊重される立場になることが多いのに対し、立場も対等、腕力のレベル等でも対等な相手との関係では、事が決着に至るまでに、被害者の立場でも、加害者の立場でも、さまざまな次元の多岐な事柄を学ぶ。当然、「子ども主体」で問題を解決させようと考えてるのは無謀である。さりとて、「大人主導」でケンカをやめさせるだけが能ではない。むしろ、どちらかが泣き出すぐらいまで待ち、その後双方の大人が、相手の子どもを非難するのではなく、自分のほうの子どもをなだめつつ、教え、論ずることが重要になる。他者というものの存在、折り合いのつけ方や距離のとり方、不快

感の処理の仕方等を学ぶ機会になる。

## ③いわゆる子ども同士のケンカ

上述した①と②をふまえて育った子どもであれば、「大人主導」の働きかけを必要とする事態にまで至ることは少ないと思われる。ただし、その時点での介入は不要でも、せっかくの機会を無駄にする手はない。落ちていく頃合いを見て、年齢相応の分別、年齢相応の解決方法、さらにはより高次の正義感、等に気づかせていく「大人主導」の働きかけがあってよい。小学校の高学年にもなれば、ケンカを誘発しやすい言動や、ケンカを避けるために有効な手段等についても、考えさせる機会になりうる。

## ④陰湿な手段によるいじめや差別

腕力を用いない分、一見、合法的に見える。しかも、相手の気持ちを思いやれないというより、多くの場合、相手の痛みがわかった上で、自分のいらだち等の解消や利益誘導のために、自己正当化を伴いつつ行われるのが、こうした行為である。小学校の高学年、それもある程度の精神年齢に至らなければ、加害者にはならない。自らの非を簡単には認めようとしない子どもに対して、毅然とした「大人主導」の働きかけが求められる。被害者が反論したり、他者に訴えたりできない等の弱みにつけ込む形で行われる卑劣な行動が容認されてはならない。その一方で、集団や社会から承認される体験を重ねさせることで、そのような負の行動に及ぶ必要のない状態に育つような算段も求められよう。

\*

ところで、子どもたちが揉めそうになったり、少しトラブルが起きたりすると、すぐさま「仲よくなるためのゲーム」や「人間関係づくりのエクササイズ」等を行って事態を收拾させたがる大人も増えている。しかし、その多くは、自分の目の前からトラブルを消したいだけ、自分がトラブルを解決させたと思いきみただけの大人のエゴである。子ども自身が問題に向き合うことも、「子ども主体」で解決できる力を育むこともせず、「大人主導」で子どもの目先をそらすだけの取り組みでは、たとえその場は収まっても、問題そのものが解消したわけではないし、自ら問題を解決できる力が子どもに備わったわけでもない。だから、しばらくすれば問題が再燃する。そうなったら再びゲームやエクササイズ、という繰り返して「お茶を濁す」のでは、いつまで経っても「子どもが育つ」ことはない。結局のところ、発達する機会を奪って、問題を先送りしているだけであることに、気づく必要がある。

あるいは、「ケンカにならないためのスキル」や「自分の主張を通しやすくするテクニク」「問題解決の方法」を教えたがる人々もいる。しかし、これとても「発達の程度」と「発達の可能性」を考慮すべきであろう。自分の欲求や相手の欲求にきちんと目を向けることができ、世の中には相容れない欲求が存在することを実感し、ときには理不尽とも思えるような力が行使されることをも理解した後に、問題を大きくしない、問題を事前に回避する等のために何が可能かを考えさせるのでなければ、そこで教え込まれたことを逆手にとり、口先だけが達者であったり、テクニクを悪用したりする子どもが生まれかねない。自他を尊重しているからケンカはしたくないが、それでも起きうる利害対立をうまく解消するためにスキルが必要、と子ども自らが思い至った段階、少なくとも高校段階以上で教えても遅くはない。